慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Fintechの概観と企業価値評価：インターネット・バブルとの比較
Sub Title	
Author	諸, 明秀(Jue, Myeongsoo) 高橋, 大志(Takahashi, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2015
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2015年度経営学 第3056号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002015-3056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程

学位論文（　　2015　年度）

論文題名

Fintech の概観と企業価値評価
―インターネット・バブルとの比較―

主　査	高橋　大志
副　査	小幡　績
副　査	齋藤　卓爾
副　査	

学籍番号	81430585	氏　名	諸　明秀

論 文 要 旨

所属ゼミ	財務理論 研究会	学籍番号	81430585	氏名	諸　明秀

（論文題名）

Fintech の概観と企業価値評価
―インターネット・バブルとの比較―

（内容の要旨）

近年、フィンテックとよばれる分野が注目を集めている。フィンテック Fintech とは”Finance”と”Technology”を掛け合わせた造語であり、IT 分野における技術力を駆使して、金融の分野に参画したスタートアップ全般を指す言葉として使われる。特にリーマンショック以降、その動きは顕著になってきており、アクセンチュアの調査によれば、全世界におけるフィンテックの資金調達額は、2010 年の 20 億ドルから 2015 年には 120 億ドルと 6 倍以上増加している。その潜在市場はやがて 1 兆ドル規模になるとの予測もあり、既存の金融ビジネスのあらゆる側面が変化する可能性が高い。 一方で、こうしたフィンテックの盛り上がりを危惧する声もある。すなわち、2000 年前後のインターネット・バブルの再来ではないかという懸念である。フィンテックの台頭を支える「IT 技術の発達」というのは、1990 年末から 2000 年代初頭にかけてバブルが形成された要因の一つでもあるからだ。

本稿の目的は、フィンテックの企業価値の算定を行い、現在の株価が算定した価格からどれだけ乖離しているか、またその乖離から、フィンテック業界がバブルであるか否かを見ることである。バリュエーションの方法は主に DCF 法と類似企業比準法を用いた。また、リアル・オプションの考え方の企業価値評価への応用も試みた。さらに評価後は、感度分析を行い、算定した企業価値がどれほど変動するかについても調べてみた。

分析の結果、現時点のフィンテック企業の株価は、おおむね企業のファンダメンタルを反映したものとなっているとの結論が得られた。ただし、今後の動向には注意を要する。過去のインターネット株ブームも、始まりの段階ではバブルの水準にあるとは言えなかった。フィンテックブームが過熱していけば、インターネット・バブルのように、いつの間にかバブルを形成する可能性もある。現時点での株価の水準がバブルではないからと言って今後も安心である保証はない。投資家は常に冷静に観察することが重要だと考える。